

41868

教科書文庫

4
815
41-1912
200030 1739

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

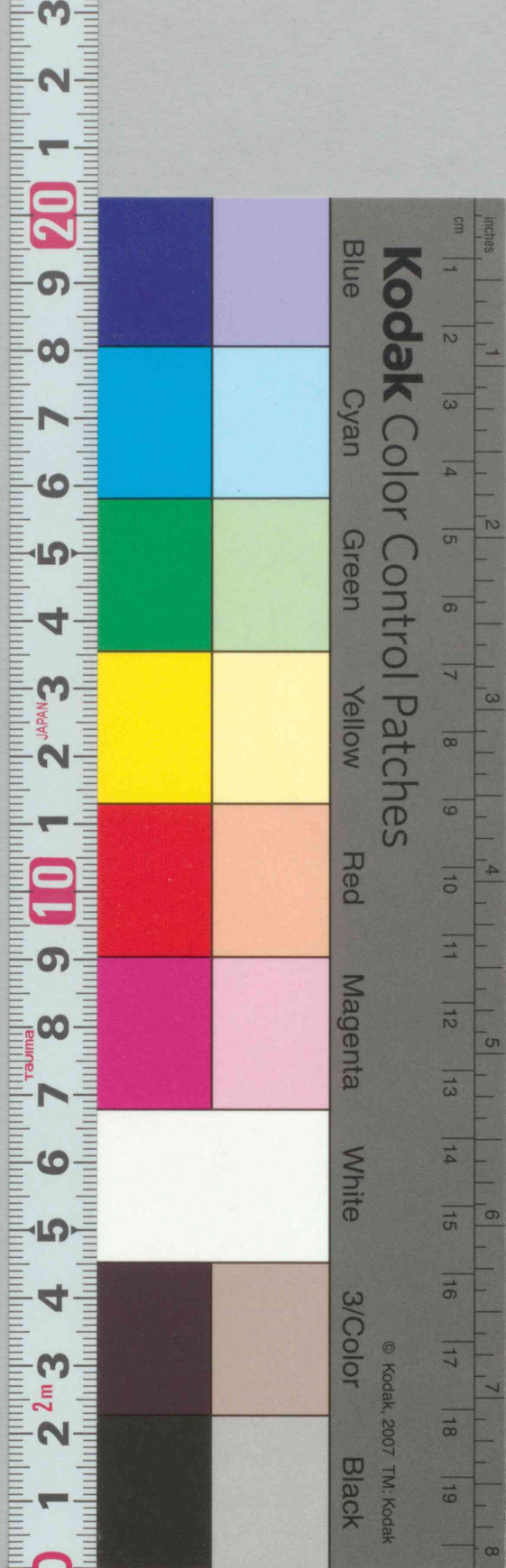


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ka14
資料室

日本文法教本

文部省檢定濟
金澤庄三郎著

上卷

文部省檢定

大正元年十月九日 中國學校國語科用

文學博士 金澤庄三郎 著

日本文法教本

東京 開成館藏版



例言

本書はさきに編纂したる「日本文法教本」を刪修して、新定の教授要目に適合せしめたるものにて、一部二卷四篇より成り、第一篇には言語の類別、第二篇及び第三篇には品詞の法格、第四篇には文章法の大要を説き、別に附録として假名遣大要及び文法上許容すべき事項を上卷末尾に載せたり。

わが國語法は、學者の研究未だ盡くさざるところあり、懸案として保留せらるゝ問題甚だ多く、また學説としては既にほゞ解決したるものも、これを普通教育程度の生徒に説くには便ならざるものあり。今日の中等學校の文法教授がその方法及び效果につきて、とかくの非難を免るゝこと能はざるも、また實に已むを

得ざるに出づ。本書は博く古今の學説を酌み、國語教育の實際に省みて、わが國語の特性として將來に異論の生ずる虞少き文法上の根本知識のみを綜合し、これが統一を試みたるものにて、著者の微意は一部の穩健なる教科書を供給せむとするにあり。本書の内容果してこの企望に副へりや否や。これが今後の改善は偏に大方の深切なる忠言に須たざるべからず。

ここに改版に當りて、申ねて當初編纂の趣旨を明にす。

大正元年八月

上卷目次

第一篇

第一章	體言 用言 助辭	練習問題 第一	一
第二章	品詞	練習問題 第二	四
第三章	名詞	練習問題 第三	五
第四章	代名詞	練習問題 第四	七
第五章	動詞	練習問題 第五	九
第六章	形容詞	練習問題 第六	二

第七章	副詞……………	三
練習問題	第七	
第八章	助動詞……………	一五
練習問題	第八	
第九章	亍爾乎波……………	一七
練習問題	第九	
第十章	接續詞……………	一九
練習問題	第十	
第十一章	感動詞……………	二〇
練習問題	第十一	
練習問題	第十二	
第十二章	熟語……………	二三
練習問題	第十三	
第十三章	接頭語 接尾語……………	二六
練習問題	第十四	
練習問題	第十五	

第二篇

第一章	名詞の種類……………	三
練習問題	第一	
第二章	代名詞の種類及び稱……………	三
練習問題	第二	
第三章	動詞の活用……………	三七
練習問題	第三	
練習問題	第四	
第四章	動詞の活用の形式……………	四九
練習問題	第五	
第五章	形容詞の活用……………	五五
練習問題	第六	
練習問題	第七	
第六章	形容詞の活用の形式……………	五九
練習問題	第八	

第七章	助動詞の種類……………	六二
第八章	助動詞の活用……………	六九
	練習問題 第九	
第九章	助動詞の活用形式……………	七五
	練習問題 第十	
第十章	動詞と助動詞との連続……………	八三
	練習問題 第十一	
第十一章	助動詞の相互の連続……………	九六
	練習問題 第十二	
第十二章	互爾乎波の類別及び承接……………	九九
	練習問題 第十三	
	練習問題 第十四	

附表 助動詞相互の連続表



日本文法教本 上巻

文學博士 金澤庄三郎 著

第一篇

第一章 體言 用言 助辭

言語の三大別。わが國の言語は、その性質によりて體言と用言と助辭との三つに大別することを得べし。

體言。いかやうに用ひても、形の變ることなき語を體言といふ。

(一) 花は咲きたり。
咲ける花を折ることなかれ。

(二) それは かれの 筆なり。
かれに 問へ。

(三) 花を見 また草を 摘む。
菊は また翁草 ともいふ。

右の例の花、かれ、またはすべて體言なり。

用言。用ひやうによりて形の變ることある語をば用言といふ。

(一) 書を 讀ま ず。
書を 讀む。

(二) この 花は 美し。
美しき 花 咲く。

右の例の讀ま、讀む及び美し、美しきは即ち用言なり。

體言と用言とは、いづれもそれを一つく離して用ひても意義のある語なり。

助辭。一つく離しては意義をなさぬ語を助辭といふ。

花は 咲き たり。
書を 讀ま ず。

右の例のは、たり、を、ずはいづれも助辭なり。

練習問題 第一

次の語は體言かまた用言か。

- | | | |
|---------|-------|--------|
| 一。落つ。 | 二。多し。 | 三。虎。 |
| 四。森。 | 五。われ。 | 六。うれし。 |
| 七。君。 | 八。走る。 | 九。専ら。 |
| 一〇。なんぢ。 | 一一。風。 | 一二。殆ど。 |

練習問題 第二

次の文章に用ひたる言語につきて、一つ／＼體言、用言、助辭を別て。

- 一。われらは文法を學ぶ。
- 二。これは櫻の花なり。
- 三。忠臣は孝子の門に出づ。
- 四。主人の命令には背くべからず。
- 五。汽車は今著きたり。
- 六。梅檀は二葉より芳し。
- 七。賢き人は後の世までも名を遺す。

第二章 品詞

品詞。言語は、またその職掌によりて數多の種類に分つこ

とを得べし。その一つ／＼の種類を品詞といふ。

品詞の種類。わが國語には、品詞の種類、すべて九つあり。即ち左の如し。

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| (一) 名詞。 | (二) 代名詞。 | (三) 動詞。 |
| (四) 形容詞。 | (五) 副詞。 | (六) 助動詞。 |
| (七) 亘爾乎波。 | (八) 接續詞。 | (九) 感動詞。 |

第三章 名詞

名詞。

- (一) 人。山。机。春。夢。
- (二) 文明。道德。
- (三) 秀吉。東京。臺灣。

固有名称

- (四) よみかき(讀書) 取調 洗濯
- (五) 白 圓形 重み 寒さ
- (六) 百 五冊 第六

この例の如く、(一)物の名、(二)事柄の名、(三)人または處の名、(四)動作の名、(五)色、形状、分量、性質などの名、(六)數、順序の名など、すべて事物の名稱を示す品詞を名詞といふ。

練習問題 第三

次の文章の中より名詞をぬき出せ。

- 一。夜寒し。
- 二。星光る。
- 三。氷は水よりも輕し。
- 四。わが帽子の色は黒なり。

名詞がのびを
フナヤイ

- 五。信濃川は本州第一の大河なり。
- 六。イギリスのステブソンは蒸氣機關を發明せり。
- 七。少年は盛に運動をなすべし。
- 八。太陽は西山に入れり。
- 九。春には花咲き、秋には實結ぶ。
- 一〇。朝鮮は人口千二百萬あり。
- 一一。今日の暖さは今年になりて珍し。
- 一二。右より二つめの梅の枝に一羽の鶯とまれり。

第四章 代名詞

代名詞

- (一) われはよく君の心を知れり。

- (二) これは何か。
- (三)そこは父の書齋なり。
- (四)川のこなたは花多し。

この例の中なるわれ、君、これ、何、そこ、こなたの如く、(一)人、(二)物、(三)場所、(四)方向などをさして、名詞の代に用ふる品詞を代名詞といふ。

○ 練習問題 第四

次の文章の中より代名詞をぬき出せ。

- 一。かしこは学校の庭なり。
- 二。川のあちらは満洲なり。
- 三。農夫は山のかなたへ歸りたり。
- 四。われらはここに待つべし。

三侯融より
 三侯融より
 生時大時

- 五。貴君の故郷はいづこなるか。
- 六。それは何といふ書か。
- 七。あれは僕の家のお銀杏の木なり。
- 八。かれはいづれの学校の卒業生なるか。

第五章 動詞

動詞

- (一) かなたに山あり。
- (二) 鳥飛ぶ。
- 生徒字を書く。

この例の中なるあり、飛ぶ、書くの如く、(一)存在または(二)動作をあらはす品詞を動詞といふ。

練習問題 第五

次の文章の中より動詞をぬき出せ。

- 一。月かゞやく。
- 二。わが軍敵と戦ふ。
- 三。風鈴風に動く。
- 四。兒どもは家に歸る。
- 五。栗の實枝より落ちたり。
- 六。親の恩は忘るべからず。
- 七。注意して馬に蹴らるな。
- 八。川に下りて魚を釣らむ。
- 九。走りて網を持ち來れ。
- 一〇。勉強するものには必ず賞あらむ。

即動詞

第六章 形容詞

形容詞。

- (一) この繪は美し。
- (二) 富士山は高し。
- (三) 月は地球より小し。
- (四) 氷は水より輕し。
- (五) 白き梅の花咲けり。

この例の中なる美し、高し、小し、輕し、白きの如く、事物の(一)性質、(二)形状、(三)大きさ、(四)重さ、(五)色などを形容する品詞を形容詞といふ。

かれとこれとは價同じ。

形容詞を
名詞とウツクモ
形容詞は語
言のミミシト
イハカフス
「美し」は動詞

例外) 咲きたる花は雪の如し。
 この例の中なる同じ、如しは、事物の性質または状態を比較するものにて、また形容詞なり。

練習問題 第六

次の文章の中より形容詞をぬき出せ。

- 一。春は樂し。
- 二。山けはし。
- 三。細き川あり。
- 四。この水は清し。
- 五。ともし火暗ければ、明に見えず。
- 六。行の正しき友と交れ。
- 七。心の堅きこと、鐵の如し。

此處で豆腐
 を買ひに行
 くとんぼ
 円は四角
 長は二寸
 短は一寸

- 八。色の赤き方は、價たかけれど、品よし。
- 九。この地は、夏すゞしく、冬暖し。
- 一〇。長き列車は、黒き煙を吐きつゝ、緩き坂を下れり。

第七章 副詞

副詞。

友は既に商業學校を卒業したり。
 新築したる學校は殆ど落成せり。
 この繪は最も美し。

この例の中なる既に、は動詞卒業しの意義を限定し、殆どは動詞落成せの意義を限定し、最もは形容詞美しの意義を限定す。かくの如く、すべて動詞、形容詞の意義を限定する品

副詞の用言ニシテ
 一名詞ニシテ用言ニシテ
 例外ニシテ用言ニシテ

詞を副詞といふ。

副詞は、また副詞の意義を限定することあり。

わが馬は甚だ速に走れり。

練習問題 第七

次の文章の中より副詞をぬき出せ。

- 一。 學校に行かむにはなほ早し。
- 二。 兄は専ら法律を學びたり。
- 三。 臣としてはたゞ君に忠を盡くすべし。
- 四。 われ豈これを知らざらむや。
- 五。 かれは蓋し中學校の生徒なるべし。
- 六。 こゝより遙に富士山を望むべし。
- 七。 生徒は悉く出席せり。

活字化ス
助動詞二動詞
例
た
むえ
むえ
あ

- 八。 二人はやゝ暫く語り居たり。
- 九。 みだりに鳥獸を殺すべからず。
- 一〇。 決して詐を告ぐべからず。

第八章 助動詞

助動詞。

- 學校に行くべし。
- 學校に行きたり。
- 學校に行かず。

この例の中なるべし、たり、ずの如く、動詞に結びつきて意義を添ふる品詞を助動詞といふ。

東京は日本の首都たり。

す	き	え	む	む
ぬ	め	え	む	む
ね	か	ら	め	め

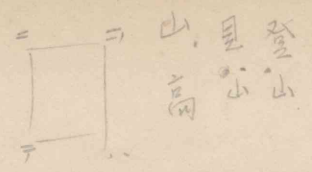
半過去
なりぬつ

その寫眞にあるはわれなり。
その時われは三歳なりき。
この例の中なるたりなり、きの如く、助動詞には名詞、代名詞に連なるものあり、また助動詞に結びつくことあり。

練習問題 第八

次の文章の中より助動詞をぬき出せ。

- 一。太郎は學校に行けり。
- 二。明日は動物園に行かむ。
- 三。孝子知事に譽めらる。
- 四。昔八幡太郎といふ大將ありき。
- 五。美しき繪を見たり。
- 六。庭の梅も咲きぬ。



- 七。皇太子殿下 北海道に行啓せらる。
- 八。頼朝義經をして平家を討たしむ。
- 九。雪積りたれば、今年は豊年なるべし。
- 一〇。今朝早く起きしかば、今なほこちよし。

第九章 豆爾乎波

豆爾乎波

鳥が鳴く。

かれは滿洲に行きたり。
一人の生徒は書きつゝ、讀む。
遅くとも正午までに行くべし。

右の例の中なるが、は、に、の、つゝ、とも、までの如く、名詞、代名詞

動詞、形容詞、その他種々の品詞につきて、他の語との關係を示す品詞を、互爾乎波 または 助詞 といふ。

練習問題 第九

次の文章の中より 互爾乎波 をぬき出せ。

- 一。友は遠方より來れり。
- 二。庭の梅は蕾をつけたり。
- 三。親の恩を忘るゝことなかれ。
- 四。左へまはれば、橋あり。
- 五。君とわれとは朋友なり。
- 六。今日は寒けれども、水凍らず。
- 七。夜のくらきに、雨さへ降れり。
- 八。わが見たるも、この品ばかりにあらず。

第十章 接續詞

接續詞。

東京及び大阪は日本の大都會なり。

美しき徳或は珍しき寶のいづれを望むか。

空は曇れり、されど雨は降るまじ。

この例の中なる 及び、或は、されど の如く、語句を接續するに用ふる品詞を 接續詞 といふ。

練習問題 第十

次の文章の中より接續詞をぬき出せ。

- 一。人々は山また山に分け入りたり。
- 二。庭に櫻或は桃を植ゑむ。

- 三。馬竝に牛は有用なる獸なり。
- 四。われは藍色もしくは青色を好む。
- 五。あれは日本一の山即ち富士山なり。
- 六。往かむか、そもく還らむか。

第十一章 感動詞

感動詞。

文章中日語除
キトモ意味は廣
係セズ
又間投詞トモナラズ

- あゝうれし。
- いざ散歩せむ。
- やあ無禮者。

この例の中なるあゝ、いざ、やあ、の如く、感動したる時に發する語をあらはす品詞を感動詞といふ。

練習問題 第十一

次の文章の中より感動詞をぬき出せ。

- 一。おゝわが兒よ。
- 二。あら悲し。
- 三。あな尊きかな、わが國體。
- 四。いざや進まむ。
- 五。やよ待て。
- 六。や何事ぞ。
- 七。すは事こそあれ。

練習問題 第十二

次の文章を一つ一つの品詞に別ちて、その名を答へよ。

- 一。馬走る。

- 二。海深し。
- 三。雲北へ飛ぶ。
- 四。敵艦忽ち沈没せり。
- 五。いでやおもしろき軍の話語るべし。
- 六。父母の恩は山よりも高し。
- 七。われは三部の藏書のうちより一部を與へむ。
- 八。汝等はやがて上級に進まむとす。

第十二章 熟語

熟語。

松林……………松林。
 受く、取る……………受け取る。

細し、長し……………細長し。

この例の松林受け取る、細長しなどの如く、二語の相合して一語となれるものを熟語といふ。

鐵道 道德 勉強 水雷艇

なども、また熟語なり。

熟語の名詞。

草花	月夜	親心	百里	三年
白雲	黒犬	古家	甘柿	大川
字引	錢入	入口	思付	見込

熟語の代名詞

あなた	が	た。	手前
貴殿	小生	拙者	自分

熟語の動詞。

飛び立つ。	書きつく。	買ひ取る。
罪す。	論ず。	勉強す。
辱うす。	善くす。	明にす。
		名づく。

熟語の形容詞。

青白し。	薄暗し。
面白し。	心よし。
待ち遠し。	あり難し。

熟語の副詞。

行くく。	かへすぐ。
常に。	誠に。
絶えず。	謹んで。
	果して。
	決して。
	様々に。
	實に。
	みだりに。
	而して。
	竝に。

熟語の接續詞。

されば。	されど。	而して。	竝に。
或は。	故に。		

疊語。熟語には、同じ語の重りて成れるものあり。

人々。	品々。	われく。
行くく。	かへすぐ。	つねく。

かくの如き熟語を特に疊語といふ。

練習問題 第十三

次の文章の中より熟語をぬき出して、その何品詞なるかをいへ。

- 一。木々の梢は、青葉の色美し。
- 二。公園の躑躅咲きそろひて、來り觀る人群集せり。
- 三。猿は木の上より誇顔に人々を見おろせり。

- 四。入學志望者は願書並に履歷書をさし出すべし。
- 五。集り來る者次第に多く、三十六人に達せり。
- 六。店員は原料を買ひ入るゝために、九州に出張す。
- 七。日本海の戦にロシヤの艦隊は全滅せり。
- 八。この頃は入荷少く、随つて市價騰貴したり。
- 九。舞鶴より松江まで、汽車の便始めて通ぜり。
- 一〇。敵軍見るく崩れ立ちて、見苦しく敗走す。

第十三章 接頭語 接尾語

接頭語

み吉野。 み空。
 を山田。 を野。

さ夜。 さ迷ふ。

眞中。 眞心。
 た計る。 た易し。

この例のみを、さ、眞、たの如く、他の語の頭に接して、これと一つの熟語を成し、或意義を添ふるものを接頭語といふ。接頭語は獨立には用ひらるゝことなし。さればもとより何の品詞にも屬せず、その用ひやうにも定まれる慣例あり。

接尾語

われら。 をとめら。
 兒ども。 生徒ども。
 憎け。 うれしけ。
 高み。 重み。

遠さ。 厚さ。

時めく。 春めく。

賢がる。 あはれがる。

鄙ぶ。 大人ぶ。

この例のらども、げみさめくがるぶの如く、他の語の尾に接して、これと一つの熟語を成し、或意義を添ふるものを接尾語といふ。接尾語もまた獨立には用ひらるゝことなし。

練習問題 第十四

次の文章の中より接頭語または接尾語を含める熟語をぬき出せ。

- 一。 長さ三町、幅五間、深さ一間の運河を開けり。
- 二。 若殿ばらはおもしろがりて、自動車を走らす。
- 三。 吹く風も春めきて、遠山には霞たなびく。

上巻全体復習
総合

- 四。 われは友だちと小川のほとりに遊べり。
- 五。 楽しさに歸るも忘れて、かれらは歌ひ舞へり。
- 六。 み山の奥の賤の童も君が御代を祝ふ。

練習問題 第十五

次の文章を一つ一つの品詞に分ち、その熟語の接頭語または接尾語を含めるものは、特にこれを詳説せよ。

- 一。 その時のうれしさ、何にかたとへむ。
- 二。 雪の重みに壓されて、小笹は折れむばかりなり。
- 三。 木の花は御國の櫻にまされるはなし。
- 四。 生命の存する間は、そこに望あり。
- 五。 秋深くして、満樹金よりも黄なり。
- 六。 農業は人をして美趣を解し、詩情を養はしむ。
- 七。 燈火の影は水に映りて、星の如く、花の如し。

- 八。覺悟はしても、無念さに、眠られぬ夜も幾度か。
- 九。皇國の興廢この一戦にあり、各員一層奮勵努力せよ。
- 一〇。たぐひなく開け行く世を見ることも、みちびく神のませばなりけり(明治天皇御製)。

第二篇

第一章 名詞の種類

普通名詞。

春來りて、山には霞たなびけり。

孝は徳の本なり。

二宮金次郎は相模の農民の子なりき。

この例の中なる春、山、霞、孝、徳、本、二宮金次郎、相模、農民、子は、いづれも名詞なり。これらの名詞の中にて、

春、山、霞、孝、徳、本、農民、子

の如く、同種類の事物に通じて用ひらるゝものを普通名詞といふ。

固有名詞。また前の名詞の中にて、

二宮金次郎、相模

の如く、同種類の中のたゞ一つの事物にのみ用ひらるゝものを固有名詞といふ。

數詞。普通名詞の中にて、事物の數または順序を示すものを數詞といふ。左にその數例を擧ぐ。

(一) ひとつ。ふたつ。とを。百。千。

(二) 一箇。五本。十枚。百冊。

(三) 第一。第二。第三。第四。五つめ。六つめ。

練習問題 第一

次の文章の中より名詞をぬき出して、普通名詞、固有名詞、數詞を別て。

一。東京の東には筑波山、西には富士山見ゆ。

二。文具店にて筆三本と筆記帳二冊とを買へり。

三。次の休日には植物園にゆかむ。

四。生絲はわが國の第一の輸出品なり。

五。アメリカより野球のしあひに來るもの多し。

六。今年の夏に、兄上は大學を卒業せらるべし。

七。陸には鐵道通じ、海には航路開けたり。

八。大石良雄等四十七人の義士は主の仇を報ぜり。

九。廣瀨中佐は旅順口にて名譽の戰死をなせり。

一〇。あまりの騒がしさに人は皆眠をさませり。

第二章 代名詞の種類及び稱

人代名詞。

余は汝を伴なひてかれを訪ふべし。

われはそれよりもこれを好む。

こゝよりかしこまでは甚だ遠からず。

あちこちの花はいづれも咲きたり。

この例の中なる余、汝、かれ、われ、それ、これ、こゝ、かしこ、あち、こち、いづれは皆代名詞なり。これらの代名詞の中にて、

余、汝、かれ、われ

の如く、専ら人をいふに用ふるものを人代名詞といふ。

指示代名詞。また前の代名詞の中にて

それ、これ、こゝ、かしこ、あち、こち、いづれ

の如く、事物、場所、方向をいふに用ふるものを指示代名詞といふ。

人代名詞の稱

人代名詞には、(一)おのれを指すものと、(二)對

話の對手を指すものと、(三)第三者を指すものと、(四)何人を指すかの明ならぬものとあり。そのおのれを指すものを第一人稱、對手を指すものを第二人稱、第三者を指すものを第三人稱、何人を指すかの明ならぬものを不定稱といふ。

第一人稱	わ、われ、僕、余、私、小生、おのれ
第二人稱	な、なれ、汝、君、あなた、おまへ
第三人稱	か、かれ
不定稱	た、たれ、どなた

指示代名詞の稱

指示代名詞にも、また(一)近きものを指す

近稱と、(二)少し隔りたるものを指す中稱と、(三)遠きものを指す遠稱と、(四)何を指すかの明ならぬ不定稱との四つあり。

	事	物	場	所	方	向
近稱	こ、これ		こ、		こちら、こなた	
中稱	そ、それ		そこ		そちら、そなた	
遠稱	あ、あれ、か、かれ		あしこ、かしこ		あちら、あなた、かなた	
不定稱	ど、どれ、いづれ		どこ、いづこ		どちら、いづち	

練習問題 第二

次の文章の中より代名詞をぬき出して、その種類と稱とを答へよ。

- それは小生の帽子なり。
- あちらより来るは誰れなるか。
- あれは錦の御旗なり。
- この山を越ゆればわが故郷なり。
- その公園へは、どちらの道を行くべきか。

- そこは暑ければ、こなたへ來給へ。
- こはたが畫きたる繪なるか。

第三章 動詞の活用

動詞の活用

- 弟は學校に行く。
- 弟は學校に行かず。
- 弟は學校に行きたり。
- 弟は學校に行けり。

この例の如く行くといふ動詞の語形は、種々に變ず。すべて動詞は、用ひやうの異なるにつれて、語形の變ずるものなり。かくの如く語形の變ずることを活用といふ。

何れ其此 何れ其此
 奴 康 九下
 丁 用 差 二 三 月 元
 二 三 月 元

この例の如く、落つといふ動詞の活用は、同じ行のイ列、ウ列の二段とウ列に^レ、れの添ひたるものと互る。かくの如き活用を上^二段活用といふ。

下二段活用。

犬吠えず。

犬吠ゆ。

犬吠ゆるか。

犬吠ゆれば、盗人去る。

この例の如く、吠ゆといふ動詞の活用は、同じ行のエ列、ウ列の二段と、ウ列に^レ、れの添ひたるものと互る。かくの如き活用を下^二段活用といふ。

上一段活用。

羽織をき^レ（著す）。

羽織をきる。

羽織をきれば、暖し。

この例の如く、きるといふ動詞の活用は、イ列の一段と、これに^レ、れの添ひたるものと互る。かくの如き活用を上^一段活用といふ。

上二段活用の動詞は、口語にてはこの活用をなす。

下一段活用。

鞠をけ^レ（蹴）たり。

鞠をける。

鞠をければ、おもしろし。

この例の如く、けるといふ動詞の活用は、エ列の一段と、これ

上二段活用の動詞の口語

Handwritten notes at the top right of the page, including the characters '上二' and '下二'.

下二段活用の
動詞の口語

に^レる、れ^レの添ひたるもの^トに互^ルる。かくの如き活用を下^一段活用といふ。

下二段活用の動詞は、口語にてはこの活用をなす。
カ行變格活用。

友はこ^レ來^スず。

友はきたり。

友^ク。

友のくる日なり。

友^クれば、共^ニ遊ばむ。

カ行變格活用
の動詞の口語

この例の如く、くといふ動詞の活用は、カ行の中にて、こ^レ、き^クとくる、くれ^トに互^ルる。かくの如き活用をカ行變格活用といふ。この活用の動詞の口語には、くといふ語形なし。

サ行變格活用。

われはかれを友とせ^ズ。

われはかれを友としたり。

われはかれを友とす。

汝はたれを友とするか。

かれを友とすれば、過なし。

この例の如く、すといふ動詞の活用は、サ行の中にて、せ^シ、す^スとする、すれ^トに互^ルる。かくの如き活用をサ行變格活用といふ。この活用の動詞の口語には、すといふ語形なし。

ナ行變格活用。

友は往^ナらず。

友は往^ニたり。

サ行變格活用
の動詞の口語

ナ行變格活用
の動詞の口語

友往ぬ。
友の往ぬる日なり。
友往ぬれば、われは書を読む。
友よ、往ぬ。

この例の如く、往ぬといふ動詞の活用は、ナ行の中にて、な、に、ぬ、ねとぬる、ぬれとに互る。かくの如き活用をナ行變格活用といふ。

この活用の動詞は、口語にては四段活用をなす。

ラ行變格活用

庭に櫻の木あらず。
庭に櫻の木あり。
庭に櫻の木あるか。

庭に櫻の木あれば、景色よし。
この例の如く、ありといふ動詞の活用は、ラ行の中にて、ら、り、る、れの四段に互る。されば、四段活用の如くなれど、その用ひやうは異にして、四段活用の動詞にては、例へば
雨ふる。

とやうに、言ひきるにはウ列の音を用ふるを、この活用にては、前の例に示せるが如く、
木あり。

とやうに、イ列の音を用ふ。かくの如き活用をラ行變格活用といふ。

ラ行變格活用
の動詞の口語

この活用の動詞は、口語にては四段活用をなす。
動詞の活用の通説。上に説きたる九活用を表にて示せば、

次の如し。

活用の種類	活用の例
三四段活用	よ(讀)ま、み、む、め
三上二段活用	お(落)ち、つ、つる、つれ
三下二段活用	ほ(吠)え、ゆ、ゆる、ゆれ
四上一段活用	(著)き、きる、きれ
五下一段活用	(蹴)け、ける、けれ
六カ行變格活用	(來)こ、き、く、くる、くれ
七サ行變格活用	(爲)せ、し、す、する、すれ
八ナ行變格活用	い(往)な、に、ぬ、ぬる、ぬれ、ね
五ラ行變格活用	あ(有)ら、り、る、れ

動詞には、四段活用をなすもの最も多く、下二段活用をなす

ものこれに次ぎて多し。また下一段活用の動詞は蹴るの一語、カ行變格活用の動詞は來の一語、ナ行變格活用の動詞は往ぬ、死ぬの二語、ラ行變格活用の動詞は有り、居り、侍りの三語あるのみなり。

練習問題 第三

次の諸動詞の活用の種類を答へよ。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 一。 浮く。 | 二。 あり。 | 三。 過ぐ。 |
| 四。 得。 | 五。 起く。 | 六。 示す。 |
| 七。 來る。 | 八。 懸く。 | 九。 居り。 |
| 一〇。 出づ。 | 一一。 生ふ。 | 一二。 似る。 |
| 一三。 立つ。 | 一四。 爲。 | 一五。 閉づ。 |
| 一六。 侍り。 | 一七。 怒る。 | 一八。 恨む。 |

- 一。死なむ。
- 二。死に果つ。
- 三。死ぬ。
- 四。死ぬる者。
- 五。死ぬれど。
- 六。死ね。

さて、右の死なむは動詞の意義が未來に成立すべきことをあらはすに用ふる形なれば、これを將然形といひ、死には用言に連ぬるに用ふる形なれば、これを連用形といひ、死ぬは文章を終ふるに用ふる形なれば、これを終止形といひ、死ぬるは體言に連ぬるに用ふる形なれば、これを連體形といひ、死ぬれは動詞の意義が既に成立したることをあらはすに用ふる形なれば、これを已然形といひ、死ねは命令の意をあらはすに用ふる形なれば、これを命令形といふ。

將然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六様の語形を

總稱して、活用形といふ。

四段活用の動詞の活用形。四段活用の動詞につきて、六様の活用形を作れば、次の如し。

- | | | | |
|---------|----------------------|------|-------------------------|
| (一) 將然形 | 書 <small>かむ</small> | 四段活用 | (ナ行變格活用) |
| (二) 連用形 | 書 <small>き果つ</small> | | |
| (三) 終止形 | 書 <small>く</small> | | (死 <small>に果つ</small>) |
| (四) 連體形 | 書 <small>く者</small> | | (死 <small>ぬる者</small>) |
| (五) 已然形 | 書 <small>けど</small> | | (死 <small>ぬれど</small>) |
| (六) 命令形 | 書 <small>け</small> | | (死 <small>ね</small>) |

されば、四段活用の動詞も、ナ行變格活用の動詞と同じく、六様の活用形を具ふるを見るべし。但し、四段活用の動詞に

ては、終止形と連體形とは相同じく、已然形と命令形ともまた相同じ。

動詞の活用形の表。他の諸活用の動詞も、すべて六様の活用形を具ふること、またナ行變格活用の動詞に同じ。次に諸活用の六様の活用形を示す。

活	用	動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四	一段活用	書く	かか	かき	かく	かく	かけ	かけ
上	二段活用	落つ	おち	おち	おつ	おつる	おつれ	おち
下	二段活用	吠ゆ	ほえ	ほえ	ほゆ	ほゆる	ほゆれ	ほえ
上	一段活用	著る	き	き	きる	きる	きれ	き
下	一段活用	蹴る	け	け	ける	ける	けれ	け
カ	行變格活用	來	こ	き	くる	くる	くれ	こ
サ	行變格活用	爲	せ	し	する	する	すれ	せ

ナ	行變格活用	死ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ
ラ	行變格活用	有り	ら	り	り	る	れ	れ

ラ行變格活用の動詞の異例

この表にて見るが如く、國語の動詞の終止形は、ラ行變格活用なるがイ列の音に終る外は、皆ウ列の音に終る。

動詞の口語の活用形。動詞の口語の活用形を表示すれば、次の如し。

活	用	動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四	一段活用	書く	かか	かき	かく	かく	かけ	かけ
上	一段活用	著る	き	き	きる	きる	きれ	き
下	一段活用	蹴る	け	け	ける	ける	けれ	け
カ	行變格活用	來	こ	き	くる	くる	くれ	こ
サ	行變格活用	爲	せ	し	する	する	すれ	せ

この表にて見るが如く、動詞の口語の活用にては、終止形と連體形とは、諸活用を通じて相同じ。

◎練習問題 第五

次の諸動詞を活用によりて類別し、その六様の活用形を表示せよ

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 一。避く。 | 二。似る。 | 三。沸く。 |
| 四。起く。 | 五。來る。 | 六。坐す。 |
| 七。突く。 | 八。見る。 | 九。示す。 |
| 一〇。閉づ。 | 一一。生ふ。 | 一二。往ぬ。 |
| 一三。問ふ。 | 一四。煮る。 | 一五。果す。 |
| 一六。申す。 | 一七。得。 | 一八。居り。 |
| 一九。取る。 | 二〇。讀む。 | 二一。覺ゆ。 |
| 二三。斷つ。 | 二四。助く。 | 二五。顯る。 |

形容詞早心り
口語、終り
ワリモノ

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 二五。延ぶ。 | 二六。追ふ。 | 二七。治む。 |
| 二八。載す。 | 二九。教ふ。 | 三〇。賀す。 |

第五章 形容詞の活用

形容詞の活用の種類。形容詞にも、動詞の如く、おのゝその活用あり。

道遠くとも、行かむ。

道遠し。

遠き道を行く。

道遠けれども、行かむ。

但しその活用の状は、動詞と異にして、左の二類に分る。

一。ク活用。

二。シク活用。

ク活用。

水清くば、大魚すまじ。

水清し。

清き水流る。

水清ければ、大魚すまず。

前の例の如く、清しといふ形容詞の語尾は、く、し、き、けれの四様に變化す。かくの如き活用をク活用といふ。

シク活用。

行正しくば、疑はれじ。

行正し。

正しき行をなせ。

行正しければ、疑はれず。

この例の如く、正しといふ形容詞の語尾は、しく、し、しき、しけれの四様に變化す。かくの如き活用をシク活用といふ。
形容詞の活用の表。

活用の種類	活 用 の 例
(一) ク活用	きよ(清) 　く、 　し、 　き、 　けれ
(三) シク活用	たゞ(正) 　しく、 　し、 　しき、 　しけれ

口語の形容詞の活用

シク活用のしといふ語尾は、またしゝとなることあり。口語にては、ク活用、シク活用は、轉じて左表の如くなれり。

(二) ク活用	きよ(清) 　く、 　い、 　けれ
(三) シク活用	たゞ(正) 　しく、 　しい、 　しけれ

練習問題 第六

次の諸形容詞の活用の種類を答へよ。

- 一。重し。
- 二。長し。
- 三。樂し。
- 四。安し。
- 五。久し。
- 六。善し。
- 七。悪し。
- 八。珍し。
- 九。廣し。
- 一〇。惜し。
- 二。甘し。
- 三。熱し。

練習問題 第七

次の文章の中より形容詞をぬき出して、その活用の種類を答へよ。

- 一。この池は淺し。
- 二。太郎はわが親しき友なり。
- 三。新高山は富士山よりも高し。
- 四。明き窓の下にてふるき書を読む。
- 五。石は堅くして、重し。
- 六。わかき大將は逞しき馬に乗れり。

- 七。かれは法律に精し。
- 八。水は低き方へ流る。
- 九。良薬口ににがし。
- 一〇。わが母は優しき人なり。

第六章 形容詞の活用の形式

形容詞の活用形。例へば、ク活用の形容詞清しにつきて、動詞の如く、種々の活用形を作るに、次の如し。

- (一) 將然形 清くば (死なば)
- (二) 連用形 清く澄む (死に果つ)
- (三) 終止形 清し (死ぬ)
- (四) 連體形 清き者 (死ぬる者)

- (五) 已然形 清けれど (死ぬれど)
- (六) (命令形) (死ぬ)

即ち形容詞にも、動詞と同じく種々の活用形ありて、たゞ命令形の闕くるのみなることを知るべし。

形容詞の活用形の表。

活用	形容詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ク活用	清し	きよく	きよく	きよし	きよき	きよけれ	
シク活用	正し	たゞしく	たゞしく	たゞし	たゞしき	たゞしけれ	

形容詞の口語の活用形の表。

活用	形容詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ク活用	清い		きよく	きよい	きよい	きよけれ	
シク活用	正しい		たゞしく	たゞしい	たゞしい	たゞしけれ	

練習問題 第八

次の諸形容詞を活用によりて類別し、その活用形を表示せよ。

- 一。善し。 二。悪し。 三。多し。
- 四。煩はし。 五。貧し。 六。篤し。
- 七。怪し。 八。堅し。 九。珍し。
- 一〇。やさし。 一一。涼し。 一二。遠し。
- 一三。新し。 一四。暑し。 一五。はづかし。

第七章 助動詞の種類

助動詞の種類。助動詞をその動詞及び名詞、代名詞、助動詞に添ふる意義によりて、次の十種に分つことを得。

- 一。肯定の助動詞。 二。否定の助動詞。

- 三。推量の助動詞。
- 四。時の助動詞。
- 五。使役の助動詞。
- 六。受身の助動詞。
- 七。可能の助動詞。
- 八。尊敬の助動詞。
- 九。希望の助動詞。
- 一〇。命令の助動詞。

肯定の助動詞。

この木は櫻なり。

われは支那に行くなり。

東京は日本の首都たり。

この例の如くなりたりは行くといふ動詞及び櫻、首都といふ名詞の意義をそのままに肯定す。これらを肯定の助動詞といふ。

否定の助動詞。

不

すぬね

かれは悪人にあらず。

かれは悪人にあらず。

この例の如く、ず、じはありといふ動作を否定す。これらを否定の助動詞といふ。

推量の助動詞。

かれは行くらむ。テアム

かれは行きけむ。ケデアム

かれは行くべし。デアム

かれは行くめり。カクマシ

かれは行くまじ。マシ

この例の如く、らむ、けむ、べし、めり、まじは行くといふ動作を推量す。これらを推量の助動詞といふ。

時の助動詞。

われは行きき。
 われは行きけり。
 われは行かむ。
 われは行きぬ。
 われは行きつ。
 われは行きたり。
 われは行けり。

この例の如く、きけりは既に前に行くといふ動作のありしことをあらはし、むは今より後に行くといふ動作のあらむことをあらはし、またぬ、つ、たり、りは行くといふ動作の全く終了したることをあらはす。かくの如く、きけり、む、ぬ、つ、た

り、りは動詞に時間に關する意義を添ふる助動詞にて、これらを時の助動詞といふ。

使役の助動詞。

父は太郎を東京に行かす。
 父は太郎に草花を植ゑさす。
 父は太郎を東京に行かしむ。

前の例の如く、す、さす、しむは、他の者を使役して行く、植うといふ動作をなさしむることをあらはす。これらを使役の助動詞といふ。

受身の助動詞。

われは級長に選ばる。
 われは總代に舉げらる。

(一) 使役 (テ、エ、ス)
 (二) 可能 (コ、カ、ル、ベシ)
 (三) 命 (シ、マ、ス)
 (四) 義務 (ナ、ル、ベシ)

この例の如く、る、らるは他の者より選ぶ、舉ぐといふ動作をしかけらるゝことをあらはす。これらを受身の助動詞といふ。

可能の助動詞。

(オモシロクニ)

われは一日に十里歩まる。

われは困難に堪へらる。

われは一日に十里を歩むべし。

この例の如く、る、らる、べしは歩む、堪ふといふ動作をおのれ能くなし得ることをあらはす。これらを可能の助動詞といふ。

べしは推量の助動詞なるが轉じたるなり。

尊敬の助動詞。

母喜ばる。

先生歸省せらる。

殿下知事を召さす。

殿下競技を御覽ぜさす。

この例の如く、る、らる、す、さすは他の動作を尊敬していふことをあらはす。これらを尊敬の助動詞といふ。

る、らる、す、さすは可能の助動詞、使役の助動詞なるが轉じたるなり。

希望の助動詞。

われは行きたし。

この例の如く、たしは行くといふ動作を希望することをあらはす。これを希望の助動詞といふ。

命令の助動詞。

汝行くべし。

この例の如く、べしは行くといふ動作を命令することをあらはす。これを命令の助動詞といふ。

べしは推量の助動詞なるが轉じたるなり。

助動詞の種類を表

一	肯定の助動詞	なり、たり
二	否定の助動詞	ず、じ
三	推量の助動詞	らむ、けむ、べし、めり、まじ
四	時の助動詞	き、けり、む、ぬ、つ、たり、り
五	使役の助動詞	す、さす、しむ
六	受身の助動詞	る、らる

七	可能の助動詞	る、らる、べし
八	尊敬の助動詞	る、らる、す、さす
九	希望の助動詞	たし
一〇	命令の助動詞	べし

第八章 助動詞の活用

助動詞の活用。助動詞にもまた活用あり。

かれは今朝行きたらむ。

かれは今朝行きたり。

かれは今朝行きたるべし。

かれは今朝行きたれども歸らず。

助動詞活用の種類。助動詞の活用は左の六類に分る。

- 一。動詞の下二段活用に等しきもの。
- 二。動詞のナ行變格活用に等しきもの。
- 三。動詞のラ行變格活用に等しきもの。
- 四。形容詞のク活用に等しきもの。
- 五。形容詞のシク活用に等しきもの。
- 六。特殊の活用をなすもの。

下二段活用に等しきもの。つ、す、さす、しむ、る、らるの六助動詞の活用は動詞の下二段活用に等し。

つ	て、	つ、	つる、	つれ
す	せ、	す、	する、	すれ
さす	させ、	さす、	さする、	さすれ
しむ	しめ、	しむ、	しむる、	しむれ

る	れ、	る、	る、	るれ
らる	られ、	らる、	らる、	らるれ

す、さすは、使役の助動詞としても、尊敬の助動詞としても、活用相同じく、またる、らるは受身の助動詞としても、可能の助動詞としても、尊敬の助動詞としても、活用相同じく、その状態いづれも右の表に示すが如し。

これらの下二段活用に等しき活用をなす助動詞は、口語にては、下一段活用に等しき活用をなすこと、なほ下二段活用の動詞の口語が下一段活用をなすが如し。

ナ行變格活用に等しきもの。ぬといふ助動詞の活用は、動詞のナ行變格活用に等し。

ぬ	な、	に、	ぬ、	ぬる、	ぬれ、	ね
---	----	----	----	-----	-----	---

ラ行變格活用に等しきもの。なり、たり(肯定)、めり、けり、たり(時)りの六助動詞の活用は、動詞のラ行變格活用に等し。

なり	なら、	なり、	なる、	なれ
たり	たら、	たり、	たる、	たれ
めり	—	めり、	める、	めれ
けり	—	けり、	ける、	けれ
たり	たら、	たり、	たる、	たれ
り	—	り、	る、	れ

肯定の助動詞たりも、時の助動詞たりも、その活用の相同じきを見るべし。

ク活用に等しきもの。べし、たしの二助動詞の活用は、形容詞のク活用に等し。

べし	べく、	べし、	べき、	べけれ
たし	たく、	たし、	たき、	たけれ

べしは推量の助動詞としても、可能の助動詞としても、また命令の助動詞としても、活用相同じ。

たしは、口語にてく、い、けれと活用すること、また形容詞のク活用の如し。

シク活用に等しきもの。まじといふ助動詞の活用は、形容詞のシク活用に等し。

まじ	まじく、	まじ、	まじき、	まじけれ
----	------	-----	------	------

特殊の活用をなすもの。ずむ、らむ、けむ、きの五助動詞の活用は、いづれも動詞または形容詞の活用と異なり。その状左の如し。

ず	ずぬね
む	むめ
らむ	らむらめ
けむ	けむけめ
き	きししか

むらむ、けむは音便にてんらん、けんと書くことあり。
じといふ助動詞には活用なし。

練習問題 第九

次の文章の中より助動詞をぬき出して、その種類と活用とを答へよ。

- 一。明日は必ず霽れむ。
- 二。弟は今朝學校に行けり。
- 三。われは昔奈良に遊びき。

- 四。汝等は生徒たる本分を守るべし。
- 五。伊藤公は始めて統監に任ぜられぬ。
- 六。今年も豊年なるべし。
- 七。兄はかれを寄宿舎に入らしめたり。
- 八。楠木正成は忠臣の鑑と仰がれけり。
- 九。雨は降らねど、風の強く吹きし日なり。
- 一〇。この由を告げさせしかば、父は安心せられたり。
- 一一。學者たらむものの心掛は、かくこそありたけれ。
- 一二。母の訪はれしは、いつなりけむ、思ひ出でられず。

第九章 助動詞の活用の形式

助動詞の活用形。

た、たく、たくた、たき、たけり

(一) 將然形 行きなむ (死なむ)
 (二) 連用形 行きにけり (死にけり)
 (三) 終止形 行きぬ (死ぬ)
 (四) 連體形 行きぬる者 (死ぬる者)
 (五) 已然形 行きぬれど (死ぬれど)
 (六) 命令形 行きね (死ね)

前の例の如く、助動詞にも動詞の如く種々の活用形あることを知るべし。

ナ行變格活用に等しき活用の助動詞の活用形。 前の例にて見るが如く、ナ行變格活用に等しき活用の助動詞は、ナ行變格活用の動詞と同じく、六様の活用形を具へ、その語形もまた相似たり。

ぬ	助動詞
な	將然形
に	連用形
ぬ	終止形
ぬる	連體形
ぬれ	已然形
ね	命令形

下二段活用に等しき活用の助動詞の活用形。 下二段活用に等しき活用の助動詞は、また下二段活用の動詞と同じく、六様の活用形を具へ、その語形もまた相似たり。

つ	助動詞
て	將然形
て	連用形
つ	終止形
つる	連體形
つれ	已然形
て	命令形
す	助動詞
せ	將然形
せ	連用形
す	終止形
する	連體形
すれ	已然形
せ	命令形
さす	助動詞
させ	將然形
させ	連用形
さす	終止形
さする	連體形
さすれ	已然形
させ	命令形
しむ	助動詞
しめ	將然形
しめ	連用形
しむ	終止形
しむる	連體形
しむれ	已然形
しめ	命令形
る	助動詞
れ	將然形
れ	連用形
る	終止形
るゝ	連體形
るれ	已然形
れ	命令形
らる	助動詞
られ	將然形
られ	連用形
らる	終止形
らるゝ	連體形
らるれ	已然形
られ	命令形

下二段活用に等しき活用の助動詞の口語の活用形

但し、らるは可能の助動詞としては命令形を闕く。これらの助動詞の口語の活用形は、下一段活用に似たり。

せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させ
れる	れ	れ	れる	れる	れ、	れ
られる	られ	られ	られる	られる	られ、	られ

ラ行變格活用に等しき活用の助動詞の活用形。 ラ行變格活用に等しき活用の助動詞は、またラ行變格活用の動詞と同じく、六様の活用形を具へ、その語形もまた相似たり。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

たりの口語の活用形

表中の前なるたりは肯定の助動詞にて、後なるたりは時の助動詞なり。これらの助動詞中にて、めり、けり、りの將然形とりの連用形とは、今は多く用ひられず。

また、時のたりは口語にてはたとなり、次の活用形を具ふ。

た	たら	—	た	た	たれ	—
---	----	---	---	---	----	---

活用の形容詞に等しき助動詞の活用形。 形容詞のク活用に等しき活用の助動詞べし、たし及びシク活用に等しき活用の助動詞まじは、また形容詞と同じく命令形を闕きたる

五様の活用形を具へ、その語形もまた相似たり。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まし	たく	たく	たし	たき	たけれ	—
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	—
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	—

たしの口語の活用形

たしは口語にては、ク活用の口語の如く、次の活用形を具ふ。

たい	—	たく	たい	たい	たけれ	—
----	---	----	----	----	-----	---

特殊の活用をなす助動詞の活用形。特殊の活用をなす助動詞ずにつきて、種々の活用形を作るに、次の如し。

- (一) 將然形 行かずば (死なば)
- (二) 連用形 知らず過ぐ (死に果つ)
- (三) 終止形 行かず (死ぬ)

- (四) 連體形 行かぬ者 (死ぬる者)
- (五) 已然形 行かねど (死ぬれど)
- (六) 命令形 — (死ね)

またむ、らむ、けむ、きにつきて種々の活用形を作るに、その終止形、連體形、已然形は左の如し。

- (三) 終止形 行かむ、 行くらむ、 行きけむ、 行きき。
 - (四) 連體形 行かむ者、 行くらむ者、 行きけむ者、 行きし者。
 - (五) 已然形 行かめど、 行くらめど、 行きけめど、 行きしかど。
- 而して將然形、連用形、命令形は共に闕けたり。

次にこれらの特殊の活用をなす助動詞の活用形を表示す。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	—
む	—	—	む	む	め	—
らむ	—	—	らむ	らむ	らめ	—
けむ	—	—	けむ	けむ	けめ	—
き	—	—	き	し	しか	—

練習問題 第十

次の文章の中にある助動詞の活用形を答へよ。

- 一。 答案をば筆にて書かす。
- 二。 子を農學校に入らしむ。
- 三。 噂せらるゝ程の大事事件にあらず。

- 四。 雪ならば、消ゆべし。
- 五。 過ぎつる方をおもひ出でぬ。
- 六。 正しと知りなば、直にこれを行へ。
- 七。 われこそ行くべけれ。
- 八。 今にして改めずば、必ず悔あらむ。

第十章 動詞と助動詞との連続

動詞と助動詞との連続

- 死なしむ。
- 死にたり。
- 死ぬべし。
- 死ぬるなり。

なりの連続

この例の如く、助動詞しむは「死ぬ」といふ動詞に連なるに、その将来形よりし、助動詞たりは同じくその連用形よりし、助動詞べしは同じくその終止形よりし、助動詞なりは同じくその連體形よりす。これによりて、助動詞が動詞に連なるには、それく定まりたる法則のあることを知るべし。

肯定の助動詞の連続。 肯定の助動詞なりが動詞に連なるには、その連體形よりす。

われは立志篇を讀むなり。

梅の實落つるなり。

なりはまた形容詞の連體形にも連なる。

花は赤きなり。

なりは名詞及び代名詞にも結びつく。

たりの連続

この終の例なる明、稀なども一種の名詞と見る。

肯定の助動詞たりは、専ら名詞及び代名詞に結びつく。

われらは中學生たり。

理由の何たるを問はず。

風采堂々たり。

衆欣然たり。

否定の助動詞の連続。 否定の助動詞ずじが動詞に連なるには、その将来形よりす。

ず及びじの連続

らむ、べし、め
り及びまじの
連続

われはこの書を讀ます。
校則に背くべからず。
成績の優等なるもの少からず。
梅の實落ちず。
かれは決して悪人に與せじ。

推量の助動詞の連續。 推量の助動詞らむ、べし、めり、まじが動詞に連なるには、その終止形よりす。但し、ラ行變格活用に限りて、これらの助動詞は皆その連體形に連なる。

梅の實落つらむ。
月の出づるにてもあるらむ。
梅の實落つべし。
この類、外にもあるべし。

けむの連續

ぬ、つ、たり、
き、けりの連
續

梅の實落つめり。
梅の實落つまじ。
推量の助動詞けむが動詞に連なるには、その連用形よりす。
梅の實落ちけむ。
訪ふ人ありけむ。

時の助動詞の連續。 時の助動詞ぬ、つ、たり、き、けりが動詞に連なるには、その連用形よりす。

われはこの書を讀みぬ。
われはこの書を讀みつ。
われはこの書を讀みたり。
われはこの書を讀みき。
われはこの書を讀みけり。

ぬ及びきの連
續の異例

但し、ぬはナ行變格活用の動詞には連ならず。またきがカ行變格活用、サ行變格活用の動詞に連なるにも異例ありて、その終止形きはカ行變格活用の動詞には連ならず。また連體形し、已然形しかはサ行變格活用にては連用形に連ならずして、その將然形に連なり、別になほカ行變格活用の將然形にも連なる。これを表にて示せば、左の如し。

活用の種類		動詞	將然形	助動詞	連用形	助動詞
カ行變格活用	サ行變格活用	く(來)	こ	き	き	き
		す(爲)	せ	し	し	し
			か	か	か	か

しの連續の慣
用異例

かくの如く、し、しかはサ行變格活用の將然形に連なりて、せし、しかとなるより、これと混同して、サ行四段活用にては

押しし、押ししか、
示しし、示ししか

などいふべきを、そのせといふ語尾を含める已然形に連ねて、

押せし、押せしか、
示せし、示せしか

などいふことあり。

また、時の助動詞りは、専ら四段活用及びサ行變格活用の動詞に限りて結びつき、四段活用にてはその已然形に、サ行變格活用にてはその將然形に連なる。

われはかの書を讀めり。

新聞紙は盛にこれを論ぜり。

時の助動詞むが動詞に連なるには、その將然形よりす。

われは書を讀まむ。

梅の實落ちむ。

むの連續

りの連續

ての連続に伴
なふ音便

また、時の助動詞つゝの活用形てが四段活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用の諸動詞の連用形に連なりて、例へば

書きて、

請ひて、

勝ちて、 買ひて、 取りて、 ありて、

飛びて、 讀みて、 死にて

などいふべきを、音便にて

書いて、

請うて、

勝つて、 買つて、 取つて、 あつて、

飛んで、 讀んで、 死んで、

などいふことあり。

す、さす、しむ
の連続

使役の助動詞の連続。使役の助動詞す、さす、しむが動詞に連なるには、その將然形よりす。

われは弟に書を讀ます。

教師生徒に手を舉げさす。

生徒をして日課を復習せしむ。

但しすとさすとは相分れて、すは四段活用、ナ行變格活用及びラ行變格活用の動詞に結びつき、さすはその他の諸活用の動詞に結びつく。

さすがサ行變格活用の動詞に結びつき、その將然形に連なりて、例へば、手習せさす、周旋せさす、賣買せさすといふべき場合に、次の如くいふことあり。

手習さす、 周旋さす、 賣買さす

さすの連続の
慣用異例

しむの連続の慣用異例

る、らるの連続

またしむが下二段活用の動詞得の將然形に連なりて得しむといふべき場合に、得せしむといふことあり。

受身の助動詞の連続。受身の助動詞る、らるが動詞に連なるには、その將然形よりす。

老嫗、孫に手を引かる。

孝子、政府より譽めらる。

但し、るは四段活用、ナ行變格活用及びラ行變格活用の動詞に結びつき、らるはその他の諸活用の動詞に結びつく。

らるがサ行變格活用の動詞に結びつき、その將然形に連なりて、例へば、評せらる、代表せらる、保護せらるといふべき場合に、次の如くいふことあり。

評さる、

代表さる、

保護さる、

らるの連続の慣用異例

可能の助動詞の連続。可能の助動詞る、らるは、その動詞と

連続する法則、全く受身の助動詞る、らると同じ。

可能の助動詞べしは、その動詞と連続する法則、全く推量の助動詞べしと同じ。

尊敬の助動詞の連続。尊敬の助動詞る、らるは、その動詞と連続する法則、全く可能の助動詞る、らると同じ。

また尊敬の助動詞す、さすも、その動詞と連続する法則、全く使役の助動詞す、さすと同じ。

希望の助動詞の連続。希望の助動詞たしが動詞に連なるには、その連用形よりす。

われは、かの書を読みたし。

この法を世に傳へたし。

たしの連続

九。萬事をかれに任し、に、よくわが信頼に報へり。
一〇。その徳を慕ふて、村民皆喜むで先生を迎へり。

第十一章 助動詞の相互の連続

助動詞の相互の連続。例へば、過去に他を使役して、或動作をなさしめしことをあらはすには、使役の助動詞と過去の助動詞とを併せ用ひて、共に動詞に連ね、

行かしめき

などといふ。すべて動詞には、これに肯定、否定、推量などの諸助動詞を幾重にも連ねて、種々の複雑なる意義を添ふることを得。

助動詞の相互の連続の法則。例へば

行く、しむ、らる、べし、なり

の一つの動詞と四つの助動詞とを、この順序に連ぬれば、上なる語は、下なる語に連ならむがために、いづれも適應せる活用形をとりて、

行かしめらるべきなり

となり、らるはしむの將然形に、べしはらるの終止形に、なりはべしの連體形に連なる。かくの如く、助動詞が互に連続するにも、それく定まりたる法則あるなり。

さて、これらの助動詞の互に連続する状を見るに、動詞の將然形に連なるものは、また助動詞に連なるにも、その將然形よりし、終止形に連なるものは終止形よりし、連體形に連なるものは連體形よりするなど、その連続する活用形は、動詞

と助動詞とによりて異なることなし。されば、らむべし、めり、まじの如くラ行變格活用の動詞に限りてその連體形に連なるものは、活用のラ行變格活用に等しき助動詞にも、またその連體形に連なること勿論なり。
 なほ卷末の助動詞相互の連續表を参照すべし。

練習問題 第十二

次の文章の中に、助動詞の連續を誤れるものあらば、正せ。

- 一。 かれにこの盛典を見さしたし。
- 二。 敵をして一步も進ましむるべからず。
- 三。 明朝御越し下さらず候や。
- 四。 木々の梢はもみちしつるらむ。
- 五。 全章を讀ましたる後に、これを講じさす。

- 六。 目前の小利に惑はされまじき用意を要す。
- 七。 少年をして獨立自尊の風を養はしめべきなり。

第十二章 亘爾乎波の類別及び承接

亘爾乎波の類別。普通の亘爾乎波を、そのつくべき語によりて類別すれば、次の三類に分る。

第一類。體言にのみつくもの。

が。の。に。にて。にして。を。と。とて。へ。より。から。まで。

第二類。用言にのみつくもの。

ば。と。ども。ども。して。て。つ。に。を。が。

第三類。體言にも用言にも助辭にもつくもの。

は。も。ぞ。なむ。こそ。や。か。かな。よ。
のみ。ばかり。だに。さへ。すら。

との承接。體言につきて接續詞の用をなす第一類の且爾乎波とは、その承接する語ごとに一つく添ふるを法則とす。例へば

東京と大阪と京都とは、わが國の三大市なり。

されど最終のとを省略することあり。

月と雪と花は、いづれが美しきか。

但し、例へば

山田と川村の保證人とは登校せり。

の如き場合に、最終のとを省略すれば、次の二様に解せらる

る虞あり。

山田と川村の保證人とは登校せり。

山田と川村との保證人は登校せり。

されば、意のあるところに隨ひて、いづれにもとを存せざるべからず。

とは、また體言の如くになれる語句につくことあり。

友、梅咲くと告ぐ。

人々善しといふ。

かれは、知らずと答へたり。

かれは、妖怪を見きと信ぜり。

かくの如き場合に、とは終止形に承接するを法則とすれど、連體形に承接することもなきにあらず。

空のけしき、月出づると見えたり。

愚なるものは、おのれ他に嘲笑せらるゝとも知らず。

とてはといひて、と思ひてなどの意にて、その承接の法則とに準ず。

ばの承接。第二類の亘爾乎波は用言の將然形及び已然形に承接す。

雨降らば、運動會は延びむ。

雨降れば、路あしくなる。

おのれ正しくば、人言を憂へざれ。

おのれ正しければ、人言を憂へず。

ともの承接。ともは動詞の終止形及び形容詞の將然形に承接す。

曇るとも、雨降らざらむ。

貧しくとも、何ぞ悲しまむ。

ともは動詞の連體形を承くることあり。

年月を経るとも、色は變らじ。

どどもの承接。どどもとは意義相同じく、共に用言の已然形に承接す。

雨は降れど、風は吹かず。

勉むれども、未だ及ばず。

姿は醜けれど、心は美し。

花は小けれども、香は高し。

つゝての承接。つゝは動詞のみに、その連用形に承接す。

日照りつゝ、雨降る。

ては助動詞つゝの活用形の轉じたるなり。その用言の連用形に承接すべきことは、既に説きたり。
に、をがの承接。この三つの第二類の亘爾乎波は共に用言の連體形に承接す。

人いつはりを告ぐるに、かれ疑はず。

松は昔ながらに青きを、花の色はうつろひたり。

衆は皆樂觀せるが、かれは獨り悲觀せり。

やかの承接。第三類の亘爾乎波やとかとは共に疑ふ意をあらはし、用言につくには、やははその終止形に、かははその連體形に承接す。

その書に繪ありや。

その書はおもしろしや。

その書に繪あるか。

その書はおもしろきか。

但し、やは用言の連體形にも承接することあり。

その書に繪あるや。

その書はおもしろきや。

助動詞と亘爾乎波との承接。ば、とも、ども及びて、つゝに、

をが、やかは用言につくと同じく、また助動詞につき、これと承接する法則もまた用言と承接する法則に同じ。

ともは使役の助動詞及び受身の助動詞の連體形を承くることあり。

いかに批評せらるゝとも。

強ひてこれを遵奉せしむるとも。

練習問題 第十三

次の用言及び助動詞に、一つくばともども及びがを承接せしめよ。但し承接せざるものは、その由をことわれ。

- | | | |
|----------|----------|---------|
| 一。言ふ。 | 二。忍ぶ。 | 三。譬ふ。 |
| 四。用ふ。 | 五。來。 | 六。欲す。 |
| 七。死ぬ。 | 八。あり。 | 九。善し。 |
| 一〇。悪し。 | 一一。生徒たり。 | 一二。花なり。 |
| 一三。見ず。 | 一四。あるべし。 | 一五。咲きぬ。 |
| 一六。聞きつ。 | 一七。教へたり。 | 一八。走れり。 |
| 一九。思ひき。 | 二〇。學ばむ。 | 二一。書かす。 |
| 二三。著さす。 | 二三。生ぜしむ。 | 二四。諭さる。 |
| 二五。捕へらる。 | 二六。知りたし。 | |

練習問題 第十四

次の文章につきての用方を説明し、その誤れるものは正せ。

- 一。講堂と生徒控所の一部に成績品を陳列せり。
- 二。餘興に薩摩琵琶と詩吟の蓄音機を聞きたり。
- 三。院長の診察日は水曜日と金曜日の午後なり。
- 四。校長は卒業生と第四學年以下修了者の總代に證書を授與せり。
- 五。わが國は南滿洲鐵道及び樺太の南半と關東州の租借權をロシヤより得たり。

助動詞相互の連續表

上 下	將	然	形	に	續	く	も	の	連	用	形
なり	ならず	ならじ	ならむ	—	—	しむ	—	なりき	なりけり	—	ぬ
たり*	たらず	たらし	たらむ	—	—	たらしむ	—	たりき	たりけり	—	ぬ
す	—	—	(す)らむ	—	—	(す)らむ	—	(す)らき	(す)らけり	(す)らむ	
べし	(べ)からず	—	(べ)からむ	—	—	(べ)からしむ	—	(べ)からき	(べ)からけり	(べ)からむ	
めり	—	—	—	—	—	—	—	(め)らき	(め)らけり	—	
まじ	—	—	—	—	—	—	—	(ま)じらき	(ま)じらけり	(ま)じらむ	
き	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
けり	—	—	—	—	—	—	—	(け)らき	(け)らけり	—	
む	—	—	なむ	—	—	—	—	—	—	—	
ぬ	—	—	なむ	—	—	—	—	—	—	—	
つ	—	—	てむ	—	—	—	—	てむ	てむ	—	
たり	(た)らず	—	たらむ	—	—	—	—	たり	たり	—	
り	(ら)ず	—	(ら)む	—	—	—	—	ら	(ら)けり	(ら)む	
す	せず	せじ	せむ	—	—	—	—	せ	せ	—	
なす	なせず	なせじ	なせむ	—	—	—	—	なす	なす	—	
しむ	しめず	しめじ	しめむ	—	—	—	—	しむ	しむ	—	
る	れず	れじ	れむ	—	—	—	—	る	る	—	
らる	られず	られじ	られむ	—	—	—	—	らる	らる	—	
たし	(た)からず	(た)からじ	(た)からむ	—	—	—	—	(た)かり	(た)かり	—	

() 現今多く用ひざるもの。
 () 動詞ありと融合したるものの連續。
 * x 連續形に續くものを便宜によりて繰入れたるもの。
 肯定の助動詞。

附録

第一 假名遣大要

その一 國語假名遣

國語假名遣

- (一) 瞻 井
- (二) 柄 餌

この例の(一)は二語共にいといひ、(二)は二語共にえといへど、これを假名にて書くときは、

- (一) い(瞻) ゐ(井)
- (二) え(柄) ゑ(餌)

と書き分けざるべからず。およそ國語を假名にて書くには、昔より一定の法あり、これを國語假名遣といふ。

紛れ易き假名

國語假名遣にて紛れ易き假名は次の如し。

- 一。い、ゐ、ひ。
- 二。え、ゑ、へ。
- 三。お、を、ほ。
- 四。は、わ。
- 五。ふ、う。
- 六。じ、ぢ。
- 七。ず、づ。

一。い、ゐ、ひの紛れ易きとき。

【一語の上】 一つの言語の上にては、ひは紛るゝことなく、ゐと書くもの甚だ少くして、およそ次の如し。

- ゐ(井)
- ゐ(蘭)
- ゐ(猪)
- ゐ(鼠)
- ゐ(居)
- ゐ(猪)
- ゐ(鼠)
- ゐ(居)

*この符あるは漢語にて、本來の國語にはあらざれど、便宜のためにこゝに載す。

これらの外は、大抵いと書くべし。

【一語の中と下と】

一語の中と下とにては、いと書くもの甚だ少く、大抵ひと書くべし。そのいと書くもの、左の如し。

(一) かい(種)

(二) 語尾のい、ゆと變るもの。

おい(老)

くい(悔)

むくい(報)

(三) 音便にていと書くべきもの。

またゐと書くもの、およそ左の如し。

- あゐ(藍)
- かたゐ(乞食)
- くらゐ(位)
- まゐ(參)
- くれなゐ(紅)
- あぢさゐ(紫陽花)
- ついゐ(蹠)
- くわゐ(慈姑)
- もとゐ(基)
- ひきゐ(牽)

二。え、ゑ、への紛れ易きとき。

一語の上 一語の上にては、へは紛るゝことなく、ゑと書くもの甚だ少くして、およそ左の如し。

- ゑ餌。
- ゑ繪。
- ゑ烏帽子。
- ゑぼ。
- ゑ餅。
- ゑづ。
- ゑ嘔吐。
- ゑし。
- ゑ鱈。
- ゑ繪。
- ゑぼ。
- ゑんじゆ。
- ゑ彫。
- ゑし。
- ゑ鱈。

これらの外は、大抵えと書くべし。

一語の中と下と

一語の中と下とにては、え及びゑと書くもの甚だ少く、大抵はへと書くべし。そのえと書くものは、およそ左の如し。

- (一) ふえ。
- ひえ。
- きえ。
- (二) 語尾のえゆと變るもの。
- こえ。
- きこ。
- ぬえ。
- ひえ。
- さえ。
- ぬえ。
- ひえ。
- さえ。
- はえ。
- さえ。

またゑと書くものは、およそ左の如し。

- (一) つゑ。
- つく。
- ゆゑ。
- (二) 語尾のうゑと變るもの。
- うゑ。
- うゑ。
- すゑ。
- いし。
- すゑ。
- こず。
- すゑ。
- すゑ。

三。お、を、ほの紛れ易きとき。

一語の上にては、ほは紛るゝことなく、をと書くもの甚だ少くして、およそ左の如し。

- (一) を緒。
- をさ。
- を小。
- をひ。
- を麻。
- を峯。
- をぢ。
- を雄。
- をけ。
- をか。
- をば。
- をと。

をんな(女) をとめ(少女) を尾
 をばな(尾花) をかつき(鼯鼠) をとつひ(昨日)
 をとゞし(二昨年) をさ(長) をち(遠)
 をこ(痴) をし(鴛鴦) をこぜ(臙)
 をろち(天蛇) をぎ(莪) をけら(朧)
 をの(芥) をり(檻) をり(節)
 をり(居) をる(折) をさむ(治納收)
 をしふ(教) をどる(踊) をがむ(拜)
 をの、く(慄) をふ(終) をめく(呬)
 をし(愛惜) をさなし(幼) をさく(大抵)
 (二) を(書を讀む)字を書くななどのを

これらの外は大抵おと書くべし。
一語の中と下と 一語の中と下とにては、おと書くものなく、をと書くもの甚だ少くして、およそ左の如し。

あを(青) さを(竿) とを(十)
 うを(魚) かつを(鱈) さつを(獵夫)
 みを(遷) いさを(功) みさを(操)
 わざを(俳優) かを(香) しを(寐)
 たをやめ(手弱女) しを(萎) まを(申)
 あを(むく)仰) たを(やかに)婀娜) やを(徐々)
 これらの外は大抵ほと書くべし。

四。 は、わの紛れ易きとき。
わど書くもの はとわとは、一語の上にては紛るゝことなし。一語の中と下とにてはわと書くもの甚だ少くして、およそ左の如し。

あわ(泡) しわ(皺) くつわ(鬢)
 くるわ(廓) くわ(慈姑) いわし(鱒)
 はらわた(腸) ことわり(理斷) ことわざ(諺)

たわやめ(手弱女) さわやかに(爽) *ゆわう(硫黄)
 あわつ(周章) さわぐ(騒) かわく(乾)
 たわむ(撓) よわし(弱)

これらの外は大抵はと書くべし。

五。ふ、うの紛れ易きとき。

うと書くもの

ふとうとは一語の上にては紛るゝことなし。一語の中と下とにてはうと書くもの甚だ少くして左の如し。

(一) 語尾のう、ゑと變るもの。

う(種)

う(飢)

す(搦)

(二) 音便にてうと書くべきもの。

これらの外は大抵ふと書くべし。

六。じ、ぢの紛れ易きとき。

じと書くもの

よそ左の如し。

(一) うな(項)

むら(連)

つ(辻)

ひつ(辛末)

う(蛆)

は(椒)かみ(生薑)

*さ(匙)

さ(棧敷)

か(樵悴)

な(馴染)

に(躑)

た(辟易)

じとぢとの中にてじと書くものは甚だ少くして、お

ある(主)

ひ(聖)

つ(旋風旋毛)

む(終)

つ(躑躅)

ひ(鹿尾菜)

こ(鑄)

は(始)

く(挫)

な(話)

は(彈)

み(身動)

と(主婦)

に(虹)

き(雉)

か(蝮)

は(櫃)

く(罎)

や(鏝)

ま(兜)

く(扶)

に(染)

ま(交)

み(短)

- いちじるし〔著〕 かたじけなし〔辱〕
 - (二) 語尾のじ〔ず〕と變るもの。 やすんじ〔安〕
 - おもんじ〔重〕
 - おなじ〔同〕
 - すさまじ〔荒涼〕
 - ……
 - (三) 語尾のじ〔じき〕と變るもの。
 - しじみ〔現〕
 - ……
 - (四) 上にし〔の假名を受くるもの〕
 - しじみ〔緘〕
 - ……
 - (五) じ〔讀まじ書かじなどのじ〕
 - ……
- これらの外は、大抵ぢ〔と書くべし〕と書くべし。

七. すづ〔づ〕の紛れ易きとき。

- よそ左の如し。
- 【ずと書くもの】
- (一) もず〔鷗〕
 - ねずみ〔鼠〕
 - ……
 - み〔ず〕〔蚯蚓〕
 - ……

- く〔ず〕〔葛〕
 - ずみ〔梅〕
 - ……
- こ〔ず〕〔稻〕
 - いし〔ず〕〔礎〕
 - はず〔筥〕
 - ……
- か〔ず〕〔敷〕
 - き〔ず〕〔傷〕
 - はず〔機〕
 - ……
- た〔ず〕〔む〕〔付〕
 - な〔ず〕〔ら〕〔ふ〕〔準〕
 - かならず〔必〕
 - ……
- (二) 語尾のじ〔ず〕と變るもの。
 - おもんず〔重〕
 - やすんず〔安〕
 - ……
- (三) 語尾のぜ〔ず〕と變るもの。
 - まず〔交〕
 - ……
- (四) 上にす〔の假名を受くるもの〕
 - す〔ず〕〔鈴〕〔鑓〕
 - す〔ず〕〔き〕〔鱧〕
 - す〔ず〕〔め〕〔雀〕
 - ……
 - す〔ず〕〔な〕〔愁〕
 - す〔ず〕〔しろ〕〔蘿蔔〕
 - す〔ず〕〔り〕〔硯〕
 - ……
 - す〔ず〕〔ろ〕〔漫〕
 - す〔ず〕〔し〕〔生絹〕
 - す〔ず〕〔し〕〔涼〕
 - ……
 - (五) ず〔讀まじ書かすなどのず〕
 - ……

これらの外は、大抵づ〔と書くべし〕と書くべし。

その二 字音假名遣

字音假名遣

- (一) 鶯
- (二) 押
- (三) 歐
- (四) 玉
- (五) 翁

これらの漢字は、皆「オ」の如く發音すれど、これを假名にて書くときは、

- (一) あう、
- (二) あふ、
- (三) おう、
- (四) わう、
- (五) をう

とやうに書くを正しとす。かくの如く、字音を假名にて書くには昔より一定の法あり。これを字音假名遣といふ。

字音假名遣につきての心得

一つ一つの漢字の字音假名遣を明にすることは、甚だ難ければ、必要なるときには字書につきてこれを求むべきなり。今次に廣く字音假名遣につきて心得おくべきこと數條を示す。

一。

文字の構造の相通ずる漢字の字音假名遣

當 堂 黨 だう
同 筒 洞 とう

この例の如く、構造に相通ずるところありて、發音の相似たる漢字の字音假名遣は、大抵相同じ。但し、例外ありて、例へば「工」「虹」などは、こゝなれど、江はかうなり、寺はじなれど、持峙はぢなり、朮はぢゆつなれど、述術はじゆつなり、女はぢよなれど、汝如はじよなるが如し。

二。

委 わ
惟 ゐ
員 ゐん
音 いん、おん
庵 あん
寅 いん、
倭 わ
淮 わい
圓 ゐん
暗 あん
掩 えん
演 えん

この例の如く、構造に相通ずるところありて、發音の同行に通ふ漢字

字音假名遣は同行に通ふ

ウ列の下にはる
と書く

の字音假名遣は、大抵同行に通ふ。但し、これにも例外あり。例へば隠
はいんなるに穩はをんなるが如し。

三。

愛	……あい、	海	……かい、
生	……せい、	丁	……てい、
水	……すゐ、	類	……るゐ、

この例の如く、字音假名遣にては、ア列またはエ列の下にて「イ」と發音す
るものの「イ」音は「い」と書き、ウ列の下にて「イ」と發音するものの「イ」音は「ゐ
と書くべし。

四。

促音にも讀む漢
字の長音

合併	……がつぺい、	合同	……がふどう、
立體	……りつたい、	建立	……こんりふ、

この例の如く、促音にも長音にも發音する漢字にては、その長音を書
くに、終の假名をふとす。

漢音に「エイ」の
音を含む漢字の
吳音

五。

正當	……せいとう、	正月	……しやうぐわつ、
平均	……へいきん、	平等	……びやうどう、
規定	……きてい、	約定	……やくぢやう、
有名	……いうめい、	本名	……ほんみやう、

この例の如く、漢音には「エイ」の音を含み、吳音には「ヨ」の音を含む字
にては、その「ヨ」をやうと書くべし。

六。

吳音にウ列の音
を含む漢字のオ
列の長音

公平	……こうへい、	公家	……くげ、
口上	……こうじやう、	口授	……くじゆ、
出頭	……しゆつとう、	頭巾	……づきん、
奉公	……ほうこう、	供奉	……ぐぶ、
供給	……きようきふ、	供物	……くもつ、

この例の如く、漢音には「オ」_ウの音を含み、吳音にはウ列の音を含

む字にては、その「オー」及び「ヨ」の音を共にオ列の假名にうを附けてあらはすべし。

第二 文法上許容スベキ事項

(明治三十八年十二月二日
文部省告示第五十八號)

教科書ノ檢定又ハ編纂ニ關シ文法上許容スベキ事項ヲ定ムルコト左ノ如シ

文法上許容スベキ事項

- 一 「居リ」恨ム「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
- 二 「シクシ」シキ活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

- 四 「コトナリ」異ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キル

モ妨ナシ

五、「セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「セラル」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

罪サル

評サル

解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得」ヲ用キルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ」カニ連ネテ「暮」シシ時「過」シカバ「ナドイフ」ベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」「ナドトスル」モ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九 てにをは「ハ」動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例

花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇 疑ノてにをは「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ

妨ナシ

例

有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

二

てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルルトモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

三

てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ

嘲弄セラルルト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ

三

語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳①ヲ讀ムベシ

四

上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン
幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

一五 てにをは「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ
誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ)應募者ハ多カルベシ

一六 「トイフ」「トイフ語」ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ

顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センニハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト竝行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會及高等教育會議ニ諮問セシニ何レモ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

大正元年八月七日印
 大正元年八月十日發
 大正元年九月廿七日訂正再版印刷
 大正元年九月三十日訂正再版發行



著者

金澤庄三郎

發行者

西野虎吉

印刷者

東京市京橋區築地三丁目十一番地
野村宗十郎

發行所

東京市小石川區小日向水道町七十三番地
関成館

西部販賣所

大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角
三木佐助

東部販賣所

東京市日本橋區數寄屋町九番地
林平次郎

日本文法教本

上卷定價金參拾錢

